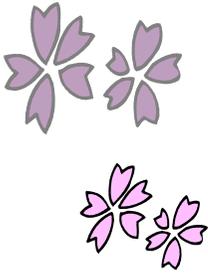


はあもにい



発行元：特定非営利活動法人 セルフ・サポート研究所
 一薬物依存症者をもつ家族の会【はあもにい】一
 〒 136-0071 東京都江東区亀戸 3-61-22
 Tel 03-3683-3231
 そよかぜライン（毎週・月・pm 1：00～8：30）
 Tel 03-5628-2522
 URL <http://www10.ocn.ne.jp/~hamoni/>



なかま

一緒に 泣いてくれる

仲間がいる

一緒に 笑ってくれる

仲間がいる

怒りを

受け止めてくれる

仲間がいる

悲しみを

受け止めてくれる

仲間がいる

ひとりでいても

ひとりでじゃない

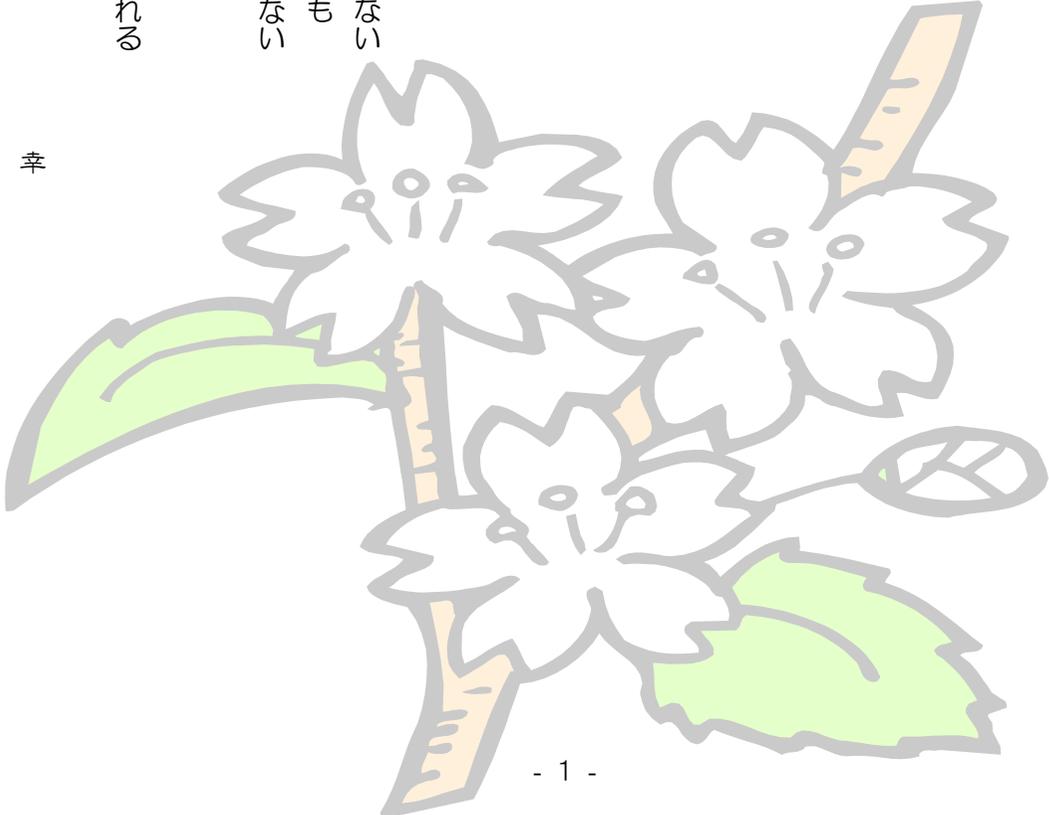
見知らぬ人の中にも

孤独じゃない

やさしい空気が

私を 支えてくれる

幸



フリーダム セミナー

『薬物依存と家族支援』

大阪府委託事業

(実施団体) : Freedom

大阪精神病院協会

於：アピカ大阪
2005. 2. 11 (金)

フリーダム・大阪ダルク支援センターの活動を継承したものです。

【はあもにい】の活動と、何か連携できるものがあるのかもしれない、と思いついて大阪まで飛んでみました。

『薬物依存と家族への支援』

講演内容

- 一 薬物依存症とは
- 二 薬物問題で悩む家族の置かれている状況

- 三 薬物問題を維持する家族システム
- 四 薬物問題維持システムの中で家族が陥っている状態
- 五 家族にとって必要なこと

○知識の不足による当惑や誤解

○親の育て方が悪い? ・この子の性格上の問題? ・道徳性の欠如? ・人間性の問題? など、病気として捉えてない。

○薬物問題による日常的ストレス

○社会からの責任追及と家族の責任感

○罪、恥、恐れによる親族や地域社会からの孤立

○家族内社会資源の不足

六 家族への支援

(講演の中からの要約)

□家族の置かれている状況と社会□

家族は罪を感じている。こういう子を育てたという罪悪感。世間に顔向けできないと恥じている。また、これから将来起こすかもしれない事件、社会が自分たちを非難するのでは、といった不安や恐れなどから地域社会から孤立していく。それに薬物問題を持った人が、社会に迷惑をかけないよう守らなければ、という責任感、義務感を家族が持っている。そんな家族に対して社会は家族への過酷な期待、成人になった子どもの責任を家族が取るのは、当然と考えている。

パネルディスカッション内容の一部

それぞれの人が、現在に至るきっかけなど話されて、これから何が必要かが話し合われました。

☆家族支援に求められるもの



講師

西川京子さん

(福井県立大学看護福祉学部 社会
福祉学科講師)**パネラー**

山野尚美さん

(京都府立大学福祉社会学部助教授)

友杉明日香さん

(京都 DARC 設立準備委員会 ウィ
メンズカウンセリング京都
フェミニストカウンセラー)

田中研三さん

(京都 DARC 設立準備委員会 保護
監察官 臨床心理士)**コーディネーター**

正木恵子さん

(Freedom 理事 保護監察官 社会
福祉士)**参加して**

家族自身が、自分のことに取り組み
★家族の居場所が必要
★家族の支援は2〜3年は必要
(自助グループに通いながら、自立と
自分の人生のバランスを得る)
★配偶者のためのグループは、なかな
か定着率悪い(子育て中が多い)。

★私の感じたこと★

西川先生は、物静かな雰囲気を持って
少しお年を召された感じの方でした。し
かし、話しぶりは、力強く、特に、依存
症者を持つ家族の立場を心から理解して、
家族への支援が如何に大切かという視点
の話は、聴いていて胸がすっとする思い
でした。

私は見知らぬ土地に来て、思いがけず
自分の味方に出会ったような心強さを感じ

じました。

会場には、百二十人くらいの人が出席
されていて、席が足りなくて立っている
方、床に座っている方などいっぱいでした。
主に、フリーダムスタッフや保健
センターなど援助職の人など、北九州や
広島などの遠方からも熱心に参加されて
いたようです。

こういった場面で、専門的立場の人が、
ディスカッションすることは薬物依存症
について理解を深め、また家族への支援
が必要で大切と考えてくださる方を増や
していくととてもいい機会になったので
はないかと思いました。

【はあもい活動】

混乱して疲労困憊の時期から少しずつ
抜け出してきた家族が、当事者の家族だ
からこそできること。それは大切な社会
資源のひとつとなる活動だと、強く思い
ました。また、それは初心を忘れないで
謙虚に生きることにも役立ってくれます。



リハビリングスタッフ

セルフ・サポート研究所と、沖縄のリハビリテーション施設 GAIA を行き来しているスタッフの永山さんに、最近感じていることをお聞きしました。

永山です！この度約一年ぶりに東京のセルフ・サポート研究所に戻ってきました。

沖縄で

今回、GAIA（沖縄リハビリ施設）で仲間との生活の中で、より一層自分自身の問題に気がありました。

薬が止まり、生活していく中での課題でもある一人での時間の過ごし方についても僕の悩みでした。今まで自分ひとりの余暇時間が、決して健康的には思えませんでした。休みの日でも、掃除・洗濯などの必要最低限のことが終わったところで、どうしても「誰かいないかなァ・・・。」と、携帯に入力した知人探しのいつものパターン。東京は娯楽や知り合いも多いところでした。

今回逃げ場のない環境の沖縄で、何が出来るだろうか？季節は夏（？）四月の屋下がり。僕は南部の浜辺で寝転び、考えていました。

（分かっているのに動けない）そんな

変化のない有言不実行な自分を肯定的に生きてきたのが古い生き方でした。その不健康な考えの表れの一因でもあったのが、薬・暴力 etc...

考え始めると「またナンかしでかすかも...」煩わしさを自分に腹が立って仕方ありませんでした。底つきとターニング・ポイントを同時に迎えた気分で、「何か見つけてやる!」と今回GAIAに行くにあたり、挙げていた目標の一つを棚卸しし、実行に移すチャンスだ!と（思ったのではなく）動く発端となったのがこの浜辺でした。心地よい日差しは悪い考えなど思わせず、むしろ幾つかの選択を示してくれるような・・・。

変化していく自分

吹っ切れた僕は、一人でドライブしながら魚釣り（海・ブラックバス）や海水浴、仲良くなった古着屋へ遊びに行ったり、収穫時の農家の人と話したり。なかでも独りで映画に行くことなど考えもし

ませんでした。それが楽しみになり、これが僕にとって大きな恵みとなりました。観終わった後はコーヒーを飲みながら映画の流れを考えたり、あるシーンを自分の生き方に投影してみたり。これらとても自分の為になりました。前の僕の映画の価値観は、アクションもののみを彼女や友だちと行くことでしかありませんでした。今はジャンルを問わず素直に「いいかも?」と楽しめるようになったのも嬉しい事と思っています。

父の言葉

それから、去年の十二月の【はあもにい】による、G A I A見学会の時のことです。毎年母は参加しているので気にはならなかったのですが、今回は父も来ると聞きました。家ではたまに母が父を旅行に誘うのを目にしますが、気乗りのしない返事をするのが父でした。「あの親父が? ホントに?」以前の父とは会話



をするというより、むしろガチガチの世間体のかたまりと話すようでウンザリしたものです。様々なことで僕は両親が本当に大嫌いと思っていました。しかし僕が薬で入院した時、退院後デイケアに出ている時、何度かのスリップをした時、母だけではなく、父もカウンセリングやグループに参加していたのは後で知ったことです。思えばSSに繋がった父・母に少しずつ変化があった事を憶えています。考えてみると「それぞれがそれぞれのプログラムがあって今があるんだな」と思えた出来事でした。

当日の土曜日、空港へ【はあもにい】のお母さんたちを迎えに行くと、表面的には相変わらず口の悪い父がそこにいました。二日目は両親を北部へ観光に連れて行き、美(ちゆ)ら水族館・今帰仁城を観て58号線をゆっくり南下してきました。何度か仲間とは行ったことのある所とはいえ、両親と(しかも素面で!)沖繩にすることが不思議でした。今帰仁城の頂上で父と風景を眺めたのは、いい

気分で思い出にもなりました。今年で三四歳になる僕です。周りの友人たちの家族づきあい等を目にする時でも、ひねくれた事を言う自分がカッコイイと思っていたし、実際家族の中で自分は悪態ばかりついていた。親子確認が計れなかった事、必要のないプライドが邪魔してなかなか解放されない時期もありました(今も時折復活しますが...)。

プログラムをやっていくうちに、あるがままのごく平凡な家族が実は羨ましかったという衝撃的な事実を受け入れるようになり、以前に比べれば「今は楽な生き方ができてるな」と、感じられるようになってきました。

回復に必要なこと

自分のことばかり書いてきましたが、G A I Aの仲間たちも色々です。ですが、僕的には回復の基本は一緒だと思えます。施設に繋がるまでの本人の周囲は必死なのですが、G A I Aに繋がったのと同



に周囲の家族の方々は消耗してしまうのでしょうか、プログラム参加に対する意味合いが希薄になってしまおうように思えます。

実際に僕の場合を振り返ってみても、父や母が良かれと思ってしている考えや行動が逆に裏目に出てしまったことや、僕の病気に巻き込まれて行くなどと親子ともにスリップの連続でした。当時はアライブが東京に在り、僕はそこでプログラムの基本性を勉強(?)というか経験をしてみました。親の会のグループが身近で行われていたこともあり問題が浮上すると分かりやすいので、すり合わせ調整や確認作業もシンプルな反面、距離が近いことが災いし問題が拡大してしまう危険もありました。ですが、相互の距離が問題ではなくて必要なことは、自分自身の問題をどのように把握し(このことに気付くのはかなりの時間を要しました)、またどのように解決していきたいのか(これがお互い先取り不安で明確になりづらいんですね?)。これは各個人の

課題であり、これを実践につなげていけるのかどうか?現状のままでは不可能なのであればどのようなサポートが必要なのか?僕の家庭状況も初めは問題が複雑化していて客観的な流れを組み込むためには、親子ともにカウンセリング等を定期的に活用できたのは幸いなことです。

親か子、どちらかのみがプログラムをやることで、今後の自己問題(ご家族等も含む)や関係がスムーズに行くというものではないと思います。

やはり双方が自分自身のプログラムをやり続けることで、お互いの理解が得られるようになり、関係の回復や成長へとつながっていくのではないのでしょうか?

今出来ることを



当事者のプログラムは沖縄G A I A、家族のプログラムは東京のセルフ・サポート研究所で行われている現在、またG

A I Aに入寮している当事者のご家族のみならず、他施設・矯正施設・病院等それぞれ与えられている状況が違うご家族も含め、お互いに今取り組めることは何かを考え実行していくことが大切だと思います。

私も時折、恐れや不安で自分を見失いそうなときもありますが、初心を忘れないように明日からもG A I Aで仲間とともに日々を「今日一日」で過ごしていきたいと思っています。ではッ!



二月二十五日、彼はまた、沖縄G A I Aに向かいました。

はあもにい活動の一環として、公判の傍聴プログラムを実施しています。

薬物依存症者の裁判を司法、行政の関係者はどのように考えているのか、まず現場をみることから、そしてその関係者がどう対応しているのかを沢山の事例をみて、私たちにできることは・・・。

日本にもドラッグコートを取り入れてほしい。大きな目標でも、小さな積み重ねが大事という思いで活動しています。

公判傍聴

感想

その1

待たれる再犯防止プログラム

東京地裁で、薬物犯罪に関する公判二件を傍聴しました。二件とも執行猶予中に覚せい剤や大麻を使用し、再逮捕されたということでした。

審理の過程では、もう決して薬物に手を出さないという本人の意思を問い、親には監督責任を課すという相変わらずの状況でした。裁判官、検事、弁護士ともに、薬物依存は病気であるという認識は感じられず、リハビリの重要性については全く触れていませんでした。

折りしも前日の新聞に、法務省が、性犯罪や薬物犯罪者に対する再犯防止プログラムを策定するという記事が載っていました。刑務所内や保護観察中の仮出所にプログラム受講を義務づけることや、就職支援なども含まれるようです。同時に、厚生労働省は、脱法ドラッグについて、法改正を含んだ規制強化に乗り出す

という記事もありました。これらのことが一体となり、医療や司法領域、一般社会の認識が深まって、薬物防止策が是非実効性のある方向に進んでほしいと思います。私たちが一人ひとりも何ができるかを考えなければと思います。

今月の公判傍聴見学

予定日・ 集合場所と時間
3月23日(水) 12:50
東京地方裁判所 霞ヶ関
1階 ロビー右側

N

公判傍聴

その2

法廷その現場では



先日、仲間と公判傍聴に行ってきた。四人で行き、二人ずつ分かれて見学しました。

薬物事犯を二件、新件については再度の逮捕によるものでした。セルフ・サポート研究所で当事者の体験談を聴いている私たちにとって、その彼もそこで話される経過から判断して依存症が疑われる状態でした。しかし、検事や弁護士は、「なぜ繰り返し使ったのか、執行猶予中に使ったら捕まるのが分かっていただいでしょう。そのように前回のときに説明があったでしょう」と、いつもどおりいやらしい（と感じる）詰

問をしていました。当人は今までのことは「自分の考えが浅かった。犯罪の認識の薄さがあった」と、反省の弁を述べていました。「これからは、親は愛情をもって監視、監督をします。親の手元で仕事もさせて更生に努力します」と泣きながら証人席で誓う母親の姿は、私の家族の最初のときの裁判の状況と同じような光景でした。というように今日も、薬物依存症が病気という認識のない人たちの中の公判でした。

薬物についての知識のなさから、家族も本人も（この場において）こんなにも悲しい思いを繰り返しなくてはならないのか、憤りさえ感じました。家族に突然起きたこの問題でショックを受けているのに、頼みの弁護士でさえ、依存症を理解してないばかりに、打ちひしがれている家族を責め、その場限りの弁護で終わろうとしている状態でした。



そして、実際の体験から

二ヶ月ほど前、わが子が薬物問題で再犯を犯し、その裁判がありました。

以前はあもにいの仲間と、公判を見学しながら、また自分がこの立場になったときどうなんだろうか？と思ったこともありました。それが現実になり、ショックでもありました。

我が家の場合、前回の裁判では、控訴審の段階で「施設に行く」ことを約束していましたが、本人は執行猶予が取れなかったため、もうその約束は白紙状態にしていました。そんなことが今回の裁判では、厳しく追及され、本人は前回の約束が守れなかったことに捉われて（？）今回は施設に行くことはこの場では約束できない。という固い意志で答えていました。

こうして再犯を繰り返すのに、家族は何もしないでアパート代を支払った

り生活の援助をして、甘やかしていたのではないか。というふうに判事や検事にも追求されました。しかし、今回もお世話になった森野先生（SS研と連携・弁護士）は、依存症に詳しい弁護士さんなので、ホントにいい裁判が出来ました。証人に立った夫も、依存症になった息子の対応を、カウンセリングを受けながら私たち親が出来ることを精一杯やってきたことを話しました。

それは、それほど薬物依存症に詳しく無さそうな判事の心にも通じたように思われました。また、「あなたは、人にしールを敷かれるのはいやですか？まあ、あまり好きな人はいないかもしませんが・・・」と本人の気持ちを理解しようという感じが読み取れ、ちょっとホッとしました。

薬物についての知識と、家族の対応を日々学んでおいてよかった！こういった場で、本当に依存症を理解してもらえるチャンスのひとつになったか

もしれない。息子は自分の身を呈して、私たちに依存症が病気だということを、強く、強く、実感させてくれました。

その場には傍聴者が数人いましたが、昔は、「自分の家の恥を人に聞かせたくない」「何でここに居るの？」といった怒りと恐れを持って法廷にいた自分を思い出します。今は、逆に聞いていてもらってよかったと思える自分でした。これも、私は傍聴席にいたのでのんきなことが言えるのかもしれませんが。証人に立った夫は疲れたことでしょう。ちなみに、拘留されている息子のごころには、依存症を学ぶプログラムが今のところないようです。これからは再犯の人にも専門家のプログラムが届いてほしい。そのためには、はあもにいのできることは何か？また、みんなで知恵を出し合って一歩一歩取り組んで行きたいと思っています。

T

薬物に関する問題で困っていませんか？

薬物SOS電話（家族を対象）**そよかぜライン**

私たちも同じ悩みをもつ仲間です
誰にもいえないあなたの心の声を聴かせてください

毎週月曜日 午後1：00～午後8：30
03-5628-2522

秘密厳守

はあもにい

GAIA利用者の自主グループ “美ら(ちゅら)”グループのお知らせ

第1土曜日[16:30-18:30]

- 『アラノンで今日一日』と『ナラノンのミーティングハンドブック(ブルーブック)』の読み合わせ
- テーマにもとづいたわかちあい(正直・信頼・謙虚など)

第3土曜日[16:30-18:30]

- GAIAスタッフとともに、沖縄の近況報告、情報交換など
(第4土曜日に変更になるときは202号室掲示板にてお知らせいたします)

“美ら(ちゅら)”グループについて

平成十四年度にGAIAが誕生し、依存症者本人の回復の場所が沖縄に移ったことで、これまでのように綿密に家族と本人の擦り合わせを行うことが難しくなっています。物理的な距離もあって、スタッフの方でも家族との擦り合わせが不十分になり、何か表立った問題が生じた時のみの対応になってしまいがちです。また、それぞれの家族の気持ちの中でも徐々に問題意識が低下し、本人の回復を安易に施設に委ねてしまっている部分があります。

このような問題を改善するために、GAIAの利用者とその家族を主にしたグループを新たに立ち上げることになりました。

関係者の皆さんはぜひお誘いあわせの上ご参加ください。

(原則として参加料は無料ですが、スタッフ参加時は有料(二千円)となりますので、ご了承ください。)

なお、
3月の予定
5日
26日
上記の時間
です。



美らグループに参加して

* GAIAスタッフから直接子ども様子を個人個人具体的に聞けてよかった。

* ミーティングで、他の家族の話を聴くことで自分の疑問や悩みが、少しずつ解決できてきている。

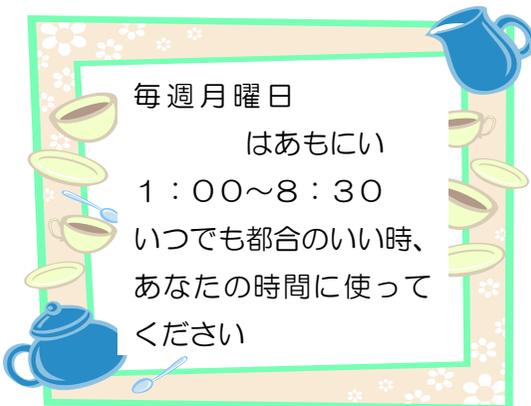
また、家に帰って夫と話を分かち合えて今の自分にはグループの存在がとても重要。

毎週月曜日

はあもにい

1:00~8:30

いつでも都合のいい時、
あなたの時間に使って
ください



適正飲酒のためのプログラム実施

精神科医師・妹尾栄一先生

(東京都精神医学総合研究所嗜癮行動研究部門)

外部講師にお招きして

参加者の

感想

A

二月二十一日(月)の夜、はあもにいの時間内に行われたこのプログラム。妹尾先生はアルコール病棟勤務経験があり、現在東京都精神医学総合研究所嗜癮行動研究部門におられ、アルコールに関する豊富な臨床経験と知識をお持ちの方である。

アルコールが身体に及ぼす影響を理解するため、まずアルコールに対する私たちの考え方(良い点、悪い点)を整理し、耐性、遺伝、酒害(特に肝臓への影響)などについてプリントを使つての話があったが、とてもわかりやすかった。

アルコールに対する私たちの考え方を整理するため、お酒を飲み続けたときの短期的な良い点、悪い点、長期的な良い点、悪い点、またお酒を止めた時の短期

的な良い点、悪い点、長期的な良い点、悪い点を出席者に出してもらい四分表にまとめたが、これはお酒を飲むすべての人にとって自分とお酒の関係を正確に捉えるのに役に立つと思われた。

アルコールの肝臓への影響についての話は医学的な説明が非常にわかりやすく、脂肪肝、肝硬変、ガンMAPTについて初めて良く理解でき役に立った。

先生の講演は今回がはじめてだったのでお酒の身体への影響という一般的な話为主で、具体的な適正飲酒にまで言及されなかった。また私がずっと疑問に思っていることで、大量にお酒を飲んでいるが、健康で仕事への影響もなく依存症にならない人と一方それほど飲まなくても依存症になってしまう人の分かれ道は何なのか、そのあたりの話も詳しく聞きたいと思っている。

今回の出席者は家族の方がほとんどで、実際にお酒の心配がある依存症者本人の出席が少なかったのが残念である。彼らにこそ聞いてほしいと切実に思った。

クスリに問題を抱える人は、他の様々な嗜癮行動にも注意を払う必要があります。その中でも、アルコールは最も身近にある物質ですから、慎重な付き合い方が求められます。適正飲酒のためのプログラムは、アルコールに関する自分自身の問題をみつめ、お酒との付き合い方を決め、それを実践してゆく方法を身につけるためのプログラムです

今回、妹尾先生からアルコールが身体に及ぼす作用と酒害についてのお話をさせていただきました。このプログラムが必要な方だけでなく、アルコールに関する話を聞いてみたいという方にも広く参加していただけるようなテーマでお話いただきました。

